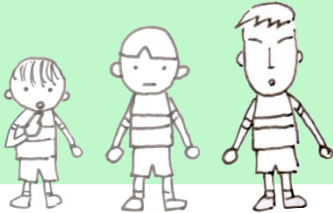
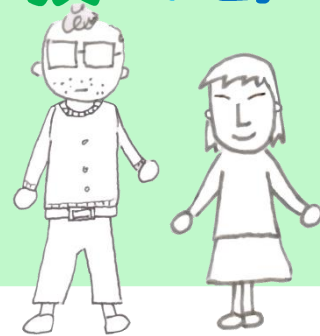


# 知的発達障害の家族の日々

## 2



大谷 多加志

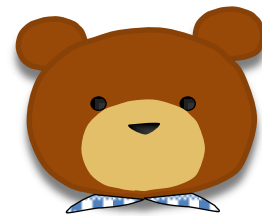


## クマゴロウ

弟が小学校の時、クリスマスプレゼント  
で届いたテディベア。

のちにクマゴロウと名付けられた。

もらった日から常に持ち歩き、弟がもらったクリスマスプレゼント  
の中で、文句なしに最大のヒットだった。



夏休みの帰省は、家族で車に乗って帰るのが常だった。セダン  
車の後部座席に兄弟が3人掛けで、4時間弱の道中となる。あ  
る時、弟が窮屈で退屈な車内に苛立ちを募らせ、道路と並走す  
る鉄道に乗ると言い出した。よく考えるとかなり滑稽なことだけ  
れど、結局母と兄、弟が電車に乗り、父と私は車で移動して、少  
し先の駅で再び落ち合うという段取りになった。

無事に駅で合流し、弟の気分も変わり明るい車内。しかし、「クマがない!」の声で空気は一変した。無くしたとしたら電車の中か、駅しかなく、結局家族5人で駅まで戻って探すことになった。

幸い、クマゴロウは小さな無人駅の待合室にちょこんと座っており、1時間足らずでの再会となった。この時の別離の危機を乗り越え、クマゴロウは四半世紀に渡って弟を支えてきた。

自分が不安な時には「何を心配してるんだ。大丈夫だから」とクマゴロウに話しかけることで、気持ちを保てる。愚痴も聞いてくれて、添い寝もしてくれる。弟は既にひげも生えたいいおっさんなので、クマを抱いて歩いている姿は、新鮮な目で見るとなかなかのインパクトがあるけれど、外出時も一緒だった。

服が破れたり、腕が取れたり、縫い目が避けて中綿が飛び出たり。何度も修繕しすっかりへたっているけれど、クマゴロウは今も健在だ。



## 全校集会

私と弟は2つ違い。

小学校の6年間で、3年生から6年生までの4年間は、弟と同時に学校に在籍していた。しかし、特殊学級(現支援学級)に通い、遅刻の常習犯で登校班にも全く入っていなかった弟と、学校での接点はさほど多くなかった。

そんな弟と、否応なく出会う場面が「全校集会」だった。

週に1度、1年生から6年生まで全員で体育館に集合し、表彰式や校長先生のお話を聞く時間は、多くの生徒にとってそうであるように、弟にとっても退屈なものであっただろうと思う。

そんな時、弟は決まって体育館前面の舞台に、裾の階段から上がっていく。階段を上がるとそこには長いカーテンが垂れている。カーテンに隠れているのかいないのか、舞台から体育館に並ぶ生徒を見下ろしにやにや嬉しそうに笑っていた。



退屈をしていた生徒たちも何となく盛り上がり、くすくす笑いもあちこちでちらほら。

私自身はクラスメイトから「ほら!止めでいいのか!?!」とか冷やかされながら、“ああ・・・、またやってるよ”という半ばあきらめの心境で見ている。

よく考えると何で弟の担任の先生は止めなかったんだろうと思ったりするけれど、そんなおおらかな空気の中だったこともあり、場にそぐわない弟の行動も、ただの日常の一コマとして過ぎていっていた。

現在の弟は、不適合状態にあります。

それは彼個人の要因もあるし、周囲の人や環境の要因もある。だから、色々な歩み寄りの中で、とりあえずここでやっていこうと折り合える点を探していくしかないのだけれど、考えてみれば弟はずっと集団の中で過ごし、その中で色々とも問題も起こしながら生きてきました。そんな諸々の出来事の中に、ひょつとしたら弟にとっては安定した生活を送るために必要な要素が含まれていたのではないのか、と思いつつ、振り返っていた時に思い出したのが今回の「クマゴロウ」と「全校集会」のエピソードです。